《第10回国際日本学シンポジウム報告９》

『源氏物語』竹河巻「手にかくる」歌と「むらさきの」歌について
――松にかかる藤――

原　山　絵美子*

１．はじめに

『源氏物語』を題材とした絵画作品を、一般に「源氏絵」という。本稿では、『源氏物語』の竹河巻におけるある場面の源氏絵を取り上げ、そこで詠まれている和歌の解釈の再考を試みる。

まず『源氏物語』の竹河巻は、光源氏が没した後の世界を描く巻の一つである。かつて鬚黒と玉鬘に仕えていた女房によって、源氏の子供や孫の世代の話が語られる。髭黒亡き後の玉鬘とその子供達の話が中心であり、玉鬘の娘である大君の求婚者として薫と蔵人少将が登場する。蔵人少将と共に、薫は大君に思いを寄せるが、結局大君は冷泉院へ参院することに決着する。

さて、竹河巻を絵画化した例は、次にあげる四場面から取材したものが多いとされる(注1)。

1．玉鬘邸で、薫が女房たちと歌を詠み交わす。
2．薫と蔵人少将が玉鬘邸で出くわす。
3．玉鬘の姫君たちが桜を賭けて囲碁を打つ。蔵人少将がこれを垣間見る。
4．薫と藤侍従が松に掛かった藤を眺める。

このうち本稿では、最後の「薫と藤侍従が松に掛かった藤を眺める」場面について再考したい(注2)。

夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連れて歩くに、かの御方の御前近く見やらるる五葉に藤のいとおもしろく咲きかかりたるを、水のほとりの石に苔を蓆にてながめゐたまへり。まほにはあらねど、世の中恨めしげにかすめつつ語らふ。

手にかくるものにしあらば
　　藤の花松よりまさる色を見ましや

とて花を見上げたる気色など、あやしくあはれに心苦しく思ほゆれば、わが心にあらぬ世のありさまにほのめかす。

むらさきの色はかよへど
　　藤の花心にえこそかからざりけれ

まめなる君にて、いとほしと思へり。いと心まどふばかりは思ひいられざりしかど、口惜しうはおぼえけり。

新編日本古典文学全集『源氏物語　5』（小学館・1997年）

これは大君が冷泉院へ参院した後の場面で、薫の未練を描く段である。ある日の夕暮れ、薫は大君の御座所の近くを藤侍従と歩いていた。そこで薫は「五葉」という松に絡まる藤を見て、胸の内を「手にかくる」の和歌に詠む。その歌を聞いた大君の兄弟である藤侍従は、薫を気の毒に思って「むらさきの」の和歌を返す。「いと心まどふばかりは思ひいられざりしかど、口惜しうはおぼえけり。」とあるように、薫は大君に対して酷く思い乱れる程に執心してはいなかったが、彼女の参院を残念には思っていたのであった。

＊お茶の水女子大学大学院　院生

さて、この場面で描かれている植物、藤と松について触れておきたい。藤はマメ科フジ属の蔓性落葉木本であり、春から夏ごろにかけて薄い紫色の花を房状に垂らす。蔓性で近くのものに絡んで成長する。古典作品の中では、松と取り合わされて描かれることが多い。『枕草子』でも、「めでたきもの」の段で「色合ひ深く、花房長く咲きたる藤の花、松にかかりたる。」と述べられる(注3)。また、唐絵に松にかかる藤が描かれ、屏風歌でも紀貫之の頃からこれを題材とした和歌が詠まれるなど、絵画との結びつきが強いモチーフであることが指摘されている(注4)。竹河巻の藤と松の場面も言わば定番の取り合わせであり、そのため絵画化されることが多かったのだろうと推測される。

2．薫の「手にかくる」歌をめぐる問題

それではまず、薫の「手にかくる」の和歌から考察を始めたい。

本文の異同を見ると、第４句目の「まさる」が多くの本で「こゆる」になっている。『源氏物語大成　校異篇』（中央公論社・1953年）によれば、校合に使用された河内本の６本全て、また別本では伝西行筆の「大島雅太郎氏蔵本」(注5)、伝西行筆の静嘉堂文庫蔵本、保坂本、国冬本が「こゆる」としている。また中には「まさる」に見せ消ちで「こゆる」と傍書しているものもある(注6)。

この異同については、既に玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』に解説がある。『源氏物語評釈』は異同を挙げ、注釈書『花鳥余情』が「こゆる」の本文を採るとともに『古今和歌集』からの引き歌を指摘、この解釈を以後の注釈書がすべて踏襲していると紹介する。

『花鳥余情』の該当箇所は、「てにかゝる物にしあらは藤の花松よりこゆる色をみましや　　松よりこゆるは末の松山波こゆる心をおもひよせたり」である(注7)。ここに「末の松山」とあるので、『古今和歌集』の次の和歌を引いていると考えられるのである。

（東歌）
（みちのくうた）
君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山
浪もこえなむ
（古今和歌集・1093）

これは永遠の愛を誓う有名な和歌である。「末の松山」は、もしも自分が変心したら高い末の松山を波が越すだろうと、ありえないことのたとえとして使われている。男女の間の心変わりを表わす言葉として、「末の松山」を詠み込んだ多くの和歌の例があることは周知の通りである。

『源氏物語評釈』は、「こゆる」の本文ならまずこの歌を思い浮かべるのは当然で確かにわかりやすいのだが、この本文には従いにくいという。「こゆる」が「まさる」を訂正した本文であると見ているのである。

> 解し易い語を解しにくく誤ることは可能性が少ない。字形の点からも似ていないのである。もし一方が一方を写し誤ったのであれば、「まさる」がもとの形で「こゆる」は訂正した本文であろう。その逆は考えにくい。
> 『源氏物語評釈　第９巻』（角川書店・1967年）

「まさる」を持つ写本の複製を見ると、青表紙本の大島本(注8)や陽明文庫本(注9)における「まさる」の字母は「末左累」になっている。一方「こゆる」の写本は、河内本の尾州家本(注10)や、別本の大島本(注11)、別本の穂久迩文庫本(注12)が「己由累」である。これらの写本によれば、どちらも現行のひらがなに近い形である。字形が似ているために起こるような、見間違いによる誤写とはやはり考えにくい。『源氏物語評釈』の言うように、「まさる」を「こゆる」に訂正したものと考えるのが自然であろう。では、なぜ訂正する必要が

あったのだろうか。他の注釈書も加え、詳しく見ていくことにする。

「こゆる」を採る注釈書である『弄花抄』には、薫の和歌の後の「わか心にもあらぬ」に対する注釈に、次の様な一節がある。

> 我及ふ程の花ならはよそには見まし物をと也
> 又松山の心にては松よりこゆると云義也
> 是も我及はぬ故に松をこえたると也　よそへなるを越るといふ也 (注13)

『弄花抄』は和歌全体の意味を、自分の手が届く花ならば遠くに見ていないだろうに (注14)、としている。そして「末の松山」を踏まえて、藤の花が自分の及ばない、言わば高嶺の花であり、自分以外の人の元へ行ってしまったことを「こゆる」と表現したと注釈をつける。

この一節で注目したいのが、「よそ」という語である。『細流抄』にも「てにかくる」に「我心のまゝならはよそにはなすましきと也」とある (注15)。また「松山の意はなし」として「末の松山」を踏まえないと見る『源氏物語玉の小櫛』も、「四の句のこゆるは、たゞよそになる意にいへるのみなり」と述べている (注16)。さらに、「こゆる」を採用する『日本古典文学大系』（岩波書店・1962年）でも、次のように口語訳をしている (注17)。

> 自分の手に掛ける（思うようになる）物で、殊更にあるならば、松よりそと（よそのものとして）のあの藤の花の色（美しい大君）を眺めましょうかなあ。(眺めはしないものを。院参しては、どうにもならない。)
> 日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店・1962年）

つまり『日本古典文学大系』も、「こゆる」に対して「松よりそと（よそのものとして)」と口語訳をつけているのである。

以上見たように、これらの注釈書は「こゆる」に「よそ」の語を対応させて訳している。そして「こゆる」とは、大君が薫に関係ないところへ縁付いた意と解釈しているのである。物語の展開上、このような解釈が適当と判断されたのだろう。

それでは、「まさる」の場合どのように解釈されているのか。古注釈では、『休聞抄』に「こゆるとあるは末の松山の心かはる也　まさるとある本のときは院か我よりまさり給と也牧」とある (注18)。「こゆる」と「まさる」の両方の解釈を載せており、「まさる」とある本の場合は、冷泉院が自分より勝ることを意味するという。しかしこの記述だけでは、具体的に何を指して言っているのか分かりにくい。ひとまず置いて、戦後の「まさる」を採用している注釈書の中から代表的なものを一つ掲出する。

> もし自分の手にかけることができるものであったなら、あの藤の花の、松よりも濃く美しいその色をただむなしく眺めているだけですまされようか
> 新編日本古典文学全集『源氏物語　５』（小学館・1997年）

この例のように、「まさる」を採る戦後以降の注釈書は、「まさる」を藤の花の色が松の色より勝っているとする。その部分が「こゆる」の注釈書と異なっているのは当然であるが、「見ましや」は基本的に同じ口語訳になっているはずである。ところが、実はそうなっていないのである。「見ましや」の部分だけ二つを並べてみると、次のようになる。

> 『日本古典文学大系』「眺めましょうかなあ。(眺めはしないものを。)」
> 『新編日本古典文学全集』「ただむなしく眺めているだけですまされようか」

「こゆる」の『日本古典文学大系』が単純に訳しているのに対して、「まさる」の『新編日本古典文学全集』は「ただむなしく」や「だけですまされようか」を補っているのである。「ただむなしく」などは藤の花に自分の手が届かない様を言っており、「そと」や「よそのもの」と同義である。つまり、「まさる」を採用した注釈書は、「こゆる」に対応する「そと」や「よそのもの」といった意味を補って「見ましや」を解釈していることになる。

異同や写本から、「こゆる」は訂正した本文と考えられた。私は、その訂正の理由が「まさる」に「そと」や「よそ」の意味を全く汲み取ることが出来ないためではないかと思う。この場面では、大君が薫の手の届かない存在になってしまった。そのような状況に相応しい和歌に本文を直したために、このようなことが起こったと考えられるのである。この和歌は、「まさる」が正しい本文であり、また「まさる色を見ましや」を中心に従来の解釈を再検討する必要がある。

３．薫の和歌の解釈

ｉ「色を見ましや」

『新編国歌大観』(角川書店・1983－1992) で「みましや（見ましや)」を検索すると、267件ある。これら「みましや（見ましや)」の用例は、「は」・「ば」・「せば」・「ましかば」など、「もし……なら」といった反実仮想や仮定条件の表現とともに使用されるものが多い。当該歌と同じ「色を見ましや」の例でみると、たとえば次のような和歌がある。

陽成院の一条の君
おくやまに心をいれてたづねずはふかきもみぢのいろをみましや
(大和物語・第47段・64)

延喜十三年十月十五日、内裏きくあはせに右大弁のおほせによりてたてまつる
きくの花こきもうすきもいままでにしものおかずはいろをみましや
(躬恒集・130)

以上のように、「見ましや」という語は、ある仮定が実現したら見られるはずだったものが見られるだろうか、といぶかしがる和歌に使用される。見られるはずだったものには、詠歌時に見ているものの場合もある。例に挙げた『大和物語』の歌では、「心を入れて奥山を訪ねないなら」と仮定、「深い紅葉の色を見られるだろうか」と詠んでいる。

また挙げた二例とも、仮定の部分が「たずねずは」、「おかずは」と打消の助動詞「ず」が使用されている。このように「見ましや」を持つ和歌には、仮定の部分に打消の助動詞や接続助詞が入るか、あるいは、「なかりせば」のように「……が無かったら」とするものが多い。それぞれ一例ずつ、該当の箇所に下線を引いて下に示す。

夕ぐれに、ちひさきうりを斎院より給はせたるに、かきつけてまゐらす
夕ぎりはたつをみましやうりふ山こまほしかりしわたりならでは
(和泉式部集・580)

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや
(古今和歌集・118)

さて、薫の和歌の「手にかくるものにしあらば」のような、仮定の部分に否定形を含まない用例は、267件中32首に留まる(注19)。面白いことに、肯定形の仮定をもつ「見ましや」の32首を調べたところ、７首が「よそに見ましや」の句を持っている。「こゆる」を採る注釈書が使用していた、あの「よ

そ」が含まれている点に注意しなくてはならない。

（七月中）
そのかみにいはほにたねをまけりせばあきの
たのみをよそにみましや
（好忠集・206）

残花隔河といへるこころをよめる
わたるべきあさせもあらば散りのこる梢の花
をよそにみましや
（月詣和歌集・702・高階業重）

『好忠集』の例では、然るべき時期に種蒔きをしていれば秋の収穫を「よそに」見ることはないだろうと詠む。また『月詣和歌集』は、花との間を川に隔てられている題で、渡ることのできる浅瀬があれば散り残る花を「よそに」見ないだろうと詠んでいる。以上の例のように、肯定形の仮定の場合、そこに述べられているのは望ましい状況である。それを受けた「見ましや」を持つ句では、仮定が実現したら「よそに」見ないだろうと締めくくられている。

さて、薫の「手にかくるものにしあらば」を直訳すると、「（藤の花を）自分の手に掛けるものであるならば」であり、薫が望んでいる状況が詠まれているように見える。『好忠集』や『月詣和歌集』のような和歌を知っていれば、下の句には「よそに」見ないだろうと続くと予想されるところである。しかし、薫の和歌には「よそに」が入っていない。つまり、薫の和歌の「見ましや」は、仮定が実現したら「見ないだろう」とだけ口語訳するべきなのである。多くの注釈書では「こゆる」が「よそ」の意と解釈され、また「まさる」の本文には「よそ」を補うように解釈されていたが、そのように訳してはいけない箇所と思われる。

和歌を解釈する際には、他の類似した構文から意味を推測する。ところが薫の和歌は、やや例外的な構成になっており、他の用例と同様に解釈することができない。そこで解釈しやすい形に改められたために、「まさる」と「こゆる」の異同が生じたのではないか。

ⅱ「手にかくるものにしあらば」

薫の和歌における「手にかくる」は、従来「手に取ることができるものなら」(注20)のように口語訳されている。しかし、実は別の意味を汲み取らなければならない箇所ではないだろうか。

藤と松が共に絵に描かれ、また古典作品にも登場することは既に述べた。和歌や散文では、藤が松に絡みつき花を垂らしている様子を表現する際、藤が松に「かかる」または藤を松に「かく」とすることが多い。またこれを踏まえて、藤を松以外のものにかける和歌が詠まれている。今回は、この表現に注目する必要がある。

百首歌中に
夏にこそさきかかりけれふぢの花松にとのみ
も思ひけるかな
（拾遺和歌集・83・しげゆき）

院北面にて橋上藤花といふ事をよめる
色かへぬまつによそへてあづまぢのときはの
はしにかかるふぢなみ
（金葉和歌集・81・大夫典侍）

『拾遺和歌集』の例では夏に、『金葉和歌集』では常緑樹の松になぞらえて常磐の橋に、それぞれ藤が「かかる」と詠んでいる。したがって薫の場合も、松にかかる藤の和歌などを前提として、自分の手にかけるものであるならと仮定したものではないか。

ⅲ「松よりまさる色」

現行の注釈書では、「松よりまさる色」を、松より「濃い」または「美しい」藤の花の色と解釈している(注21)。同じ「まさる」であるのに、まさっ

ているのは濃さか美しさか見解が一致していない。しかしこれも理由のあることと思われる。なぜなら、松と藤の和歌には二者の色を比較したものの例が少ないからである[注22]。松と藤の色を比較した和歌だとすれば、薫の和歌は一般的な詠みぶりからは外れることになり、「松よりまさる色」に対する従来の解釈に疑問が生じる。

さてそこで、『新編国歌大観』に花の色が「まさる」と詠む和歌を求めると、見る人や生える場所によって色が「まさる」とする例がある。

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ
（源氏物語・藤裏葉巻・443・柏木）

なでしこを、ある所にたてまつる
山がつのかきほながらに見るよりは色まさるべきやどにうつさむ
（恵慶法師集・85）

ある人のむことりしてのち、はじめて人人よびて歌よみ侍りしに、藤花尚盛といふことをよみ侍りしついでに
やどからかなつになれどもふぢのはなうつろふいろの見えずもあるかな
（国基集・83）

『源氏物語』の藤裏葉巻の例は、夕霧と雲居雁の結婚が許される藤の花の宴で詠まれたものである。藤の花に雲居雁をよそえて、「見る人」つまり夕霧によってその色がまさると詠んでいる。『恵慶法師集』は撫子を贈る際のもので、自らの住処を「山がつのかきほ」と卑下し、相手の家でこそ花の色がまさると詠んでいる。また「色がまさる」例ではないが、『国基集』の例は生えている家のおかげで藤の花が夏になっても色が衰えずにいると詠んでいる。しかも詞書にあるように「むことり」して栄えている家ゆえに、藤の花も衰えないのである。

つまり薫の和歌は、藤の花を自分の手にかけるとしたら、松にかけていた時よりも色がまさるかどうかを詠んだ歌なのではないか。『休聞抄』にあった「まさるとある本のときは院か我よりまさり給と也」という説も、こうした意味を指しているとすれば納得できる。藤の花が松の木にかかるように、現在、大君は冷泉院の庇護の下に入っている。つまり、もしも大君が自分（薫）と結婚するものならば、冷泉院参院よりも「まさる色」の大君を見るだろうかと嘆じたのである。言い換えるならば、冷泉院に参院したために大君がすばらしく見えるのであって、もしも自分と結婚していたら彼女は今のようにはならなかったと自嘲的に詠んだのである。

４．藤侍従の「むらさきの」歌をめぐる問題と解釈

次に、藤侍従の「むらさきの」歌について考察する。この和歌は薫に応じるように詠まれており、薫の和歌と対照しながら解釈する。

異同を見ると、結句の「かからさりけれ」が「まかせさりけれ」になっている本がある。『源氏物語大成』によれば、青表紙本系の三条西家本、別本系の伝西行筆の大島雅太郎氏蔵本が該当する。なお、伝西行筆の大島本は「かせちさりけれ」に「ま」の補入と「ち」のミセケチによって「まかせさりけれ」になっている[注23]。他に、別本の伝西行筆静嘉堂文庫蔵本が「かはらさりけれ」である。つまり『源氏物語大成』に採られている19本中、青表紙本系の三条西家本を除いて一文字目が「か」である。したがって「まさる」と同様、「かからさりけれ」が他の和歌の詠み方とは異なるために、「まかせさりけれ」へと改められた可能性が考えられないだろうか[注24]。

古注釈では、『一葉集』に「兄弟なからわか心任ならぬとの心也」[注25]と見え、その後も『細流

抄』の「薫にあはせはやと思へとも藤侍従の心にまかせぬ事なりと也」(注26) といった解釈が続いていく。つまり、「心に」「かからざりけれ」を「心に」「まかせざりけれ」と訳しているのである。『源氏物語玉の小櫛』も、「結句、藤の花の縁にて、かゝらざりけれとある本、まされり、意は、まかせざりけれと同じ」と言っている(注27)。藤の花の縁語として、「まかせざりけれ」を「かからざりけれ」と表現したと指摘しているのである。

戦後の主な注釈書も、こうした古注釈の解釈を受け継いでいる。本文はみな「かからざりけれ」を採用している。口語訳の代表例として、『新編日本古典文学全集』のものを掲出する。

その藤の花は私には同じゆかりの、色も濃い間柄ですが、だからとて私の思うようにはならなかったのでした
『新編日本古典文学全集』「源氏物語　5」(小学館・1997年)

また多くの注釈書が「かかる」には、藤の花が垂れ下がる意味と「心にかかる」が掛けられていると見ている(注28)。そしてこの「心にかかる」には、「心にまかせる」あるいは「思うに任せる」、「思い通りになる」などと口語訳をつけている(注29)。

しかし、これらの口語訳は他の和歌用例と比較すると問題が生じる。「心にかかる」は「心にまかせる」ではなく、気がかりであるとか、気持ちが留まるといった意味で用いられるからである。

夜思落花といへることをよめる
ころもでにひるはちりつむさくら花よるはこころにかかるなりけり
(金葉和歌集・67・隆源法師)

東山観音寺といふ所にてふぢの花いとめでたかりしに、人人、藤并恋歌よみしにひたすらにいまもむかしもわすられて心にかかるふぢのはなかな
(六条修理大夫集・134)

この歌をききて前兵衛佐ゆきむねの君のもとより
ふぢのはな見ぬよそ人のこころにもきくにつけてぞなほかかりける
(六条修理大夫集・136)

『金葉和歌集』の例は、昼に散りゆく桜を見て、桜の散り具合を夜に心配するさまを「心にかかる」と詠んだものである。昼は文字通り袖にかかるが、夜は「心にかかる」と洒落ている。『六条修理大夫集』134番歌は、常に気にかかり心に浮かぶ藤の花を詠む。同136番歌は、「しがよりかへりけるをうなどもの花山にいりてふぢの花のもとにたちよりてかへりけるに、よみておくりける／よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよえだはをるとも」(古今和歌集・119・僧正遍昭)が踏まえられ、藤の花の話を聞くことによって見ていないのに気にかかるというのである。このように「心にかかる」と詠む時は、気がかりな事や心に留まる事を表現する。つまり、自分の「心にまかせる」とは訳せないのである。

また逆に「心にまかす」には、次の例がある。

南殿の桜をよませたまへる
わがやどのさくらなれどもちるときはこころにえこそまかせざりけれ
(金葉和歌集・三奏本・43・花山院御製)

「わがやど」は自分の庭先を言う語で、この場合南殿を指している。自分の力の及ぶ場所に生えている桜ではあるが、桜の散る時は心に任すことはできない、すなわち散らさずにそのままにしておくことはできないというのである。この例は、「まかす」を採用した「むらさきの」歌と下の句が一致している。いくつか見た注釈書の訳にも近

く、こうした例を参考に訳されたものと思われる。

他の和歌用例から導き出した結果をもって、「心にえこそかからざりけれ」に文字通り口語訳をつけるのであれば、「（藤の花が）気にかかることができなかった」、「（藤の花が）心に留まることができなかった」などとなる。しかしこの場合、和歌全体の意味が通じなくなってしまう。

そこで、薫の和歌を前提にした解釈を試みてはどうだろうか。藤侍従の和歌は、薫の和歌に対する返歌のように詠まれている。二つの和歌には繋がりがあり、歌句や表現を共有したり詠みかえたりしているはずである。先ほど薫の和歌の「手にかくる」は、松にかかる藤を踏まえて詠んでいると述べた。藤侍従の和歌で「かかる」を用いている、「藤の花心にえこそかからざりけれ」は、薫と同様の表現であると考えられる。つまり藤侍従は、薫が使った藤の花が松以外の何かに「かかる」趣向を踏まえて、藤の花が自分の心に「かからざりけれ」と詠んだと考えられるのである。繰り返しになるが、薫の和歌では、藤の花はその咲きかかる対象から影響を受けると詠まれていた。よって、藤侍従はそれを踏まえて、もし藤の花が自分の心にかかっていたなら藤に働きかけることができたが、そうではなかったと返したのである。すなわち、藤の花が自分の心に「かからなかった」ために、藤の花つまり大君に影響を与えることができず、大君の結婚に関して自分は何も出来なかったと弁解しているのである。

これまでの注釈書の解釈でも、意訳として「心にまかせる」などをあててきたと思われる。しかし、薫の和歌を踏まえなければ藤侍従の和歌は読み解けないのではないか。「かからざりけれ」が藤の花の縁語であることには賛同するが、単に「まかせざりけれ」に代わる表現ではないと思う。藤侍従は、藤の花が自分の心にかかってはおらず、自分の力の及ぶ範囲になかったと詠んだのである。

5．まとめ

以上の考察を通して、二首の口語訳を試みる。

【薫の歌】手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ましや

【口語訳】藤の花を私の手にかけるものであるならば、（藤の花を）松にかけるよりまさる色を見るだろうか（大君と私が結婚するものであるならば、冷泉院に参院するより素晴らしい大君を見るだろうか）。

【藤侍従の歌】むらさきの色はかよへど藤の花心にえこそかからざりけれ

【口語訳】紫の色は通うけれども、藤の花は私の心にかからなかったのだった（私は大君の血縁者であるけれども、大君は私の影響の及ぶ範囲には居なかったのだった）。

竹河巻は、古くから紫式部以外の作者が疑われてきた巻である[注30]。その根拠の一つに、他の巻と比較した際の語句や和歌の拙劣さがある[注31]。ただし、文章や和歌の質は主観による部分もあり、具体的にどの和歌が劣るとはこれまで論じられていない。

今回検討した二首は、他の和歌と比較すると一首の構成や言葉遣いが独特であることが分かった。「手にかくる」歌の場合は、「手にかくるものにしあらば」が藤の花を薫の手に掛ける状況、つまりは玉鬘の大君が薫と結婚するという望ましい状況を仮定している。多くの和歌では、望ましい状況の仮定をし、もし仮定が実現するなら現在の不満足な状況でいるだろうかと詠んでいる。ところが、薫の和歌はそのような和歌の構成になっていなかった。また「むらさきの」歌の場合は、「心にかかる」が他の和歌では「自分の心のままになる」という意味では用いられていなかった。「松よりまさる色」と「松よりこゆる色」、「心にかからざりけり」と「心にまさらざりけり」といった異同が生じた理由や、これらの難解な部分に和歌の注釈が必要となった理由も、他の和歌と比較し

てこの二首が異質であったためと考えられる。

こうした竹河巻の和歌における特徴の原因には、様々な可能性が考えられる。作者が異なる可能性もその一つであるし、作者が同じで人物の和歌の技量に合わせて巧拙を変えている可能性もあろう。ちなみに、竹河巻の和歌には『紫式部集』に収載される和歌と類似するものがあり、それを根拠として竹河巻は紫式部の作であると論じられることもある(注32)。いずれにしても、和歌の分析が竹河巻の問題を解決する一助となることは間違いない。本稿の分析によって、少しでもこれらの問題を明らかにできれば幸いである。

テキストの引用は、和歌は『新編国歌大観』（角川書店）による。それ以外は本文または注に示した。

ご指導、ご助言くださった先生方、諸氏に御礼申し上げます。

（注）

1　秋山光和「「源氏物語絵詞」所収場面一覧と作品例との対照表」「日本の美術　No.119　源氏絵」（至文堂・1976年）。田口榮一「源氏絵帖別場面一覧」『新訂　豪華「源氏絵」の世界　源氏物語』（学習研究社・1999年）。

2　この場面は、土佐光吉・長次郎筆『源氏物語画帖』（京都国立博物館）などに絵画化されており、詞書がついている。また、『源氏物語』の絵になる場面を挙げる『源氏絵詞』（大阪府立大学学術情報センター図書館蔵・書陵部蔵）でも、取り上げられる場面である。

3　新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館・1997年）

4　片桐洋一「松にかかれる藤浪の――古今集時代研究序説のうち――」「文学・語学」（1961年６月）・『古今和歌集の研究』（明治書院・1991年）所収。

5　『源氏物語別本集成　第11巻』（おうふう・2000年）では、天理図書館蔵の「善本叢書本」として採られる。また天理図書館善本叢書　和書之部『源氏物語諸本集二』（天理大学出版部・1978年）に複製がある。

6　陽明文庫蔵本。複製は、陽明叢書国書篇第16輯『源氏物語十二』（思文閣出版・1981年）。『源氏物語大成』には採用されていないが、書陵部蔵本も「まさる」に見せ消ちで「こゆる」と傍書（『宮内庁書陵部蔵本青表紙本源氏物語　竹河』（新典社・1969年））。日本大学蔵本の三条西家証本は、「まさる」の右に「こゆイ」と傍書（『日本大学蔵源氏物語８』（八木書店・1995年））。

7　『日本文学古註釈大成』の源氏物語古註釈大成『河海抄・花鳥余情』（日本図書センター・1978年）。

8　『大島本源氏物語　第８巻』（角川書店・1996年）。

9　陽明叢書国書篇第16輯『源氏物語十二』（思文閣出版・1981年）による。見せ消ちがあり、右に「こゆる（己由累）」と傍書。

10　『尾州家河内本　第７巻』（日本古典文学会・1977年）。

11　天理図書館善本叢書　和書之部『源氏物語諸本集二』（天理大学出版部・1978年）。

12　日本古典文学影印叢刊『源氏物語　第４巻』（貴重本刊行会・1980年）。

13　源氏物語古注集成『弄花抄　付源氏物語聞書』（桜楓社・1983年）。なお、陽明文庫蔵本などはこの部分を欠き、またカタカナ交じりの文になっている本もある。

14　助動詞「まじ」の連体形は「まじき」であり、「まし」の可能性が疑われる。ここでは打消の意志を表わす「まじ」として解釈した。

15　源氏物語古注集成『細流抄』（おうふう・1980年）。

16　『本居宣長全集　第４巻』（筑摩書房・1969年）。

17　『日本古典文学大系』は宮内庁書陵部蔵本を底本としている。

18　源氏物語古注集成『休聞抄』（おうふう・1995年）。

19　ただし他出による重複を含む。

20　『新潮日本古典集成』（新潮社・1982年）、『新日本古典文学大系』（岩波書店・1996年）。『新編日本古典文学全集』（小学館・1997年）は頭注で「もし手を出すことができるのなら」と意訳している。

21　玉上琢彌『源氏物語評釈』「緑の松よりもきれいに咲いている美しい色」、『新潮日本古典集成』「松よりも濃い紫の色」、『新日本古典文学大系』「松の緑よりも美しい藤の色」。

22　藤と松の色を比較している歌には、「（その屏風障子等歌、所所のだいにしたまふ）／むらさきのいろしこければふぢの花まつのみどりもうつろひにけり」（躬恒集・177／拾遺和歌集・1070）がある。また藤に埋もれる松を詠んだ「民部卿泰憲近江守にはべりける時三井寺にて歌合し侍りけるに藤花をよみはべりける／すみのえの松のみどりもむらさきのいろにぞかくるきしのふぢなみ」（後拾遺和歌集・156・読人不知）がある。

23　天理図書館善本叢書　和書之部『源氏物語諸本

集二』（天理大学出版部・1978）による。字母は「かせちさりけれ（加世知左利遣禮）」で、「か」の右上に小さな「ま（万）」が書き込まれている。

24　写本の複製や写真版では、青表紙本の陽明文庫本、書陵部蔵本、伏見天皇本、河内本の尾州家本、高松宮御蔵本、別本の穂久迩文庫本で「可ゝ良」に、青表紙本の大島本で「加ゝ良」になっている。「ま（万）」と「か（可）」とは少し似ているが、「ら」と「せ」とを誤るとは考えにくい。

25　源氏物語古注集成　『一葉集』（桜楓社・1984年）。

26　源氏物語古注集成　『細流抄』（桜楓社・1980年）。

27　『本居宣長全集　第４巻』（筑摩書房・1969年）。

28　玉上琢弥『源氏物語評釈』「「かゝる」は「花がたれ下がる」と「心にかかる」〈自分と関係がある〉をかける、藤の縁語。湖月抄本「まかせざりけれ」は、思うままにならない意で、松にかかる意は出て来ない。」、『日本古典文学全集』（小学館・1975年）「「かかる」は「花が垂れ下がる」の意と「心にかかる」の意をかける。」など。

29　『日本古典文学大系』「私の心にどうも、勝手にする（まかせる）事ができないのでありましたよ。（故に残念に思う。）」、『新潮日本古典集成』「思うに任せませんでした。」、『新日本古典文学大系』「思い通りにはならなかった」。

30　『弄花抄』橋姫巻「宇治十帖をは大弐三位書たるといふ義有難用歟紫式部か息女也花鳥に見えたり　紅梅竹川に宇治の一二の巻混乱せり文体は又時代の移るに任て書歟」、『花屋抄』「此巻有説に紫式部か娘大弐三位つくりそへたりといふ」。

31　武田宗俊「源氏物語竹河の巻について――その紫式部の作であり得ないことに就いて――」「国語と国文学」（1949年８月）・『源氏物語の研究』（岩波書店・1954年）所収。また賀茂真淵『源氏物語評釈』は紫式部筆説だが、「此三巻はさのみ心もとゞめぬ故に官などの違も見え文の様も筆ほそくこと葉も所せきなり」と官位の矛盾と文章の質を並べて論じる。

32　今井源衛「竹河巻は紫式部原作であろう（上）」「文学研究」（1975年３月）・「竹河巻は紫式部原作であろう（下）」「語文研究」（1975年６月）・『紫林照径　源氏物語の新研究』（角川書店・1979年）・『今井源衛著作集　第１巻　王朝文学と源氏物語』（笠間書院・2003年）所収。